

フレーベル以後の幼稚園 (7)



津 守 眞

ブロー女史とセントルイスの幼稚園

フレーベルの教育理念と教育方法を、最も忠実に消化しそれを実際の教育に移したのはブロー女史であった。善い意味でも悪い意味でも、フレーベル式の幼稚園が完全な内容をもって実現され、幼稚園式教育が樹立された。そしてブロー女史にその教育展開の地盤を与えたのが、セントルイスの幼稚園であった。

ドクター・ハリスはコンコード学派の哲学者として、教育学者として知られた人であるが、早くからフレーベルの思想に接し、幼稚園運動に関心を寄せていた。当時、多くの子ども達が早くから実務につくために、学校を早くに止めなければならぬ状態にあった。それを考える時に、子どももの教育の期間を下の方に下げることが必要であることを、ドクター・ハリスは感じていた。彼がセントルイスの教育長になった時、彼は公立学校の経費によって、幼児のためのクラスを設けることを提唱した。そして「工業地区の子どもたちの平均教育年限は三年にすぎず、七才のときに学校に入って十才で学校教育を終える。もしも彼らが五才のときから学校で適当に教育されるならば、学校教育の期間は五年間になるであろう。そしてこの期間は生涯の中で消すことのできない印象を与えるに違いない」ことを強調した。このような当時の社会情勢に伴う実際的な対策として学令を下げることによって

教育の充実を計ろうとし、それをもって幼稚園としようということで、公立小学校併設の計画がなされたのであるが、それとともにドクター・ハリスは尚、それによって幼稚園がその本質を枉げることがないかどうかを恐れたのであった。

「幼稚園を公立小学校に併設することには明らかに危険がある。その第一は、正規の学校の授業で行なわれているような厳格な規律と教授法が幼稚園の中に導入されないかということである。それによって幼稚園の教育を形式化し固定化することは、幼稚園の最善の成果を破壊することである。」(註一)

公立小学校に幼稚園を併設することには、もちろん教師や外部の人々からの反対があった。それは第一には経費を賄うだけの子どもを集めることがむづかしいだろうということ、第二には幼稚園では教科書を使わないなら両親が承知しないだろうということ、第三には子どもが小さすぎて毎日通学することが困難だろうということ、(実際には九五パーセントの出席率を得た)第四には幼稚園で子どもが訓練されたら、小学校に来て困るだろうということ、(これも後にそういうことはないことが示されたのであるが)第五に子どもが小さいから怪我が多いだろうということ(これも心配したほどのことはないことであった)などが反対の理由として挙げられた。当時の幼児教育、幼稚園に対する一般の人々の認識の程がうかがわれて面白い。

一八七三年の夏に幼稚園が設立された。最初の日に二十人の子どもが来て、幾週間もたたぬ中に四十二人に増加した。スザン・ブロー女史は、このクラスの最初の教師であった。

一般の人々の予期に反して幼稚園は大成功であった。そして翌年にはもう一クラス増設された。ドクター・ハリスはこの幼稚園の成功について、「セントルイスの幼稚園設立の実験は好調に進行した。次の年には更に二校増設の予定である」と教育委員会に報告している。(註二)それから三年後には全部で三〇校のセントルイスの公立小学校に幼稚園が附設され三、三三三人の幼児と一五〇人の有給の幼稚園教員ができた。子どもの年齢は四才から八才までで、平均五才半である。この幼稚園はきわめて成功を見たので、一八八〇年には更に五十二校の小学校に幼稚園が附設されている。(註三)この間、ブロー女史はドクター・ハリスに助けられて、幼稚園のための教員の養成に当り、フレイベル主義の幼稚園の原理と實際を徹底的に普及させ、所謂フレイベリアン・オーソドックスの代表者ともさみなれることになったのである。そしてブロー女子の幼稚園が、フレイベル主義幼稚園の本山として海外にまで有名になったのである。

フレイベル主義幼稚園

私どもが今日フレイベル主義幼稚園というときに、それは過去の一時代前の幼稚園のことを指している。現在でもフレ

ーベル主義を唱道して実行している所もないではないが、フ
レーベル主義の教育理論と実際とを名実ともに具現したのは
ブロー女史の幼稚園をもって頂点とする。

フレイベル主義幼稚園は三つの特徴をもっているように思
う。第一は、フレイベルの抱いていた児童観、「いざや、わ
れらをして子らとともに生かしめよ」というフレイベルの愛
唱の句にあらわれているような児童に対する愛着の気持と、
児童の生活をどこまでも尊重する考え方である。現代も尚、
フレイベルを教育改革者として価値あらしめている、そのフ
レイベルの児童観が幼稚園運動に火をつけ、又フレイベル主
義幼稚園の伝統をつくる基となったと解してもよからう。第
二は、フレイベルの考案した教育用具、恩物の使用であり、
第三はいわば上の両者を結びつけるものとしてのフレイベル
の教育理論である。中でも教育用具と教育理論とは切り離せ
ない関係をもって生れたものであった。宇宙、生命に関する
フレイベルの哲学は抽象的であり、象徴的なものであるが、
彼は自己の直観による宇宙観を教育用具を通して子どもに伝
え、子ども自身に直観させようとしたのであった。広大な構
想の下に教材が考案されたことは卓見だったと云わねばなら
ないだろうが、その結合はやや早急だったのである。そして
時に彼の児童観と矛盾する結果をひきおこす結果ともなった
のである。フレイベル主義の幼稚園が、先づ幼稚園の創始者

であるフレイベルの構想をそのままひきついで実行しようと
したことは当然ふむべき段階であったのかもしれない。しか
しそのために、そこに批判される種を宿すことになるのであ
る。

フレイベル主義幼稚園が実際に行なっていたことは、フレ
ーベルの考案した教育の実際そのままであり、それを少しも
外さず実行しようとしたのである。従って保育は、恩物及
び母の遊戯と愛撫の歌がその中心を占めていた。例えば第一
恩物は糸をつけたボールである。ボールの球は宇宙の統一と
完全無欠をあらわす。子どもは「上へ下へ」「ぐるぐるまわ
せ」というような指示に従がってそれを動かし、そうして遊
ぶ中に宇宙の原理を会得するのである。第三恩物は八個の小
さな立方体の積木から成っている。八個の立方体はその結合
のしかたによって多種多様な表現をすることができ、全体は
部分から成ることが理解される。子どもは先づ注意深く箱を
とり上げて積木をそっと出し、それから先生に云われる通り
にいろいろの形を作るのである。全部の子どもが一斉に、先
生の指示に従がって順序を追ってやるのである。(註四)

保守派のフレイベル主義者たちは、このフレイベルの教材
と彼の教育理念とを一点一画に至るまで墨守した。そしてフ
レイベルの教材に含まれていない遊具は教育的でないとして
排斥した。ブロー女史の所論はこの点をよく示している。

「現在、幼稚園は二つの大きな危険にさらされ、フレーベルの理念の実現に大きな障害となっている。その第一は、本能的な遊戯や伝統的な玩具（人形やコマなど）に逆もどりすることである。このような傾向は、フレーベルのなしたことを認識していないことによるものである。……フレーベルは伝統的な玩具の中から、最も教育的価値のあるものを選択し、それらを秩序づけ、その使用法を案出した。もしもこのようにフレーベルによって構成された遊びが価値がないと考えるならば、幼稚園は存在価値を失なうであらう。

フレーベルは本能的な遊びの中から、その中に潜むよき芽をとり出して、それに代って性格や思考を発達させるのに適した方法を案出したのであるから、街の遊びや、無分別に用いられている玩具を再び尊重しようとする傾向は、教育的後退であると云わばならぬ。（註五）フレーベル主義幼稚園はこれ程にフレーベルの遺したやり方を重んじ、それからふみ外さないように気をつけたのである。

ブロー女史はフレーベルの崇拜者であり、フレーベル主義保育の唱道者であった。しかし同時に彼女はフレーベルの最も忠実な良き理解者であった。単にフレーベルの教材の技術的な伝達に止まったならば、フレーベル主義幼稚園はそれ程の隆昌を見なかつたであらう。ブロー女史の広い教養の上に理解されたフレーベルの理念に支えられて、フレーベル主義

幼稚園の実際は幼稚園教育の正統として広く受け入れられるに至った。それまでも幼稚園と云えば、多かれ少なかれフレーベル主義の実際によっていたのであり、当時の幼稚園は何処でも多少ともフレーベル主義に沿って行なわれていたのであるが、ブロー女史のセントルイスの公立幼稚園において、それらが組織づけられ大成したかの観を呈したのであつた。ブロー女史のセントルイスの十年間は、恐らくフレーベル主義にとって全盛期であつたといえよう。

ブロー女史は幼稚園に関する講義を公開していた。そこではフレーベルの教材の詳細及び、その後にある理論が説かれ、更にそののみでなく、古典文学や歴史哲学が講ぜられ、ダンテの神曲が論ぜられた。難解なフレーベル哲学の理解には、高度の文化的教養が必要であることを、ブロー女史は見逃さなかつたのである。この点に関して、ブロー女史はフレーベルの正当な理解者であり、幼稚園をこえて更に広い立場から幼稚園教育を見ていたと云える。広い文化的基盤に支えられた所に保育技術を見出そうとした彼女の努力に対しては今も尚賞賛すべきであると思う。ブロー女子の講座には、数多くの幼稚園の教師のみならず、母親や小学校の先生たちも参加した。そこで語られることが幼稚園のことであらうと、或いはもっと一般的な事柄であらうと構わなかつた。講義室はいつも満員であつた。そしてパイン街十五番地の建物は、

あたかも幼稚園のメッカであった。集った人々は皆力を与えられ、生活の喜びを得て帰っていった。どんなことがあっても、出席は減らなかつたし、集まる人々の熱心も衰えなかつたらそこでなされたことは正に魂の慰めであり、その成果は数字で量られるものではなかつた。それはセントルイスの数千の婦人たちに彼らの未だ覚えなかつた程の心の高まりを感じさせた。その影響は数千の家庭に浸透し、母親や子どもたちの幸福をどれだけでもなすことになったかは、思いの外であらう。そしてそれは、子どもたちの幸福のために全市を征服したのである。」(註六)

ブロー女史の幼稚園がいかに広く受け入れられたかは右の引用によっても明らかであろう。幼稚園はその理念においても、方法においても、正に独自の存在を誇つたのである。

だがこの後間もなく、フレイベル主義の幼稚園は批判の台の上に立たされてくるのである。

あのすぐれた理念をもつとフレイベルが幼稚園を創始したにもかかわらず、又多くのすぐれた尊敬すべきフレイベルの支持者が現われたにもかかわらず、何故に幼稚園はフレイベル主義、フレイベリアン・オーソドックスという形で実を結ばねばならなかつたのであろうか。私はいつも疑問に思っているのである。

——幼稚園の最も強く主張することは、

そこから幸福が生み出されることである、と私は秘かに思う。

もしも私どもが子どもの中に、仕事を愛する気持を生み出させることができるならば、彼らをいつも勤勉にさせておくことは、少しも困難ではないだろう。——スザンブロー

幼稚園の危機——フレイベル主義の崩壊

一八八五年、全国教育連盟の中に、始めて幼稚園部が設けられた。それまで幼稚園はただ子どもを遊ばせるだけで教育機関とは做しがたいとか、幼稚園は子どもに不注意な態度をうえつけるだけのものであると云われて、所謂学校教師に耳を傾けられなかつたのに対して、幼稚園が広く注目を浴びるようになったことの証左とみることもできよう。それは同時に、幼稚園とそれにつづく学校教育との相互接近を意味するものである。

その第一回の会合において、会長ウィリアム・ヘイルマンは、解決すべき問題として二つの問題を提出した。それは第一に幼稚園の教育の原理は何であるかということ、第二に幼稚園と小学校との関係は如何にあるべきか両者が接近するためには小学校及び幼稚園の両方にとって、どのような変容が必要か、ということであった。この二つの問は、すでに一部の人間からは漠然と感ぜられていた問題であり、そして近く

来るべき波瀾を予想させるものであった。プロローグ史がセントルイスの有名な仕事を始めてからすでに十五年を経過しており、フレイベル主義の教育理念や教材もすでに一般によく知られてきた時である。心ある人々は、幼稚園のやっているやり方は何か間違っているのではないかということに漠然と感じ始めていた。この時に当って、ドクター・ヘイルマンの開会の冒頭講演は、鋭い洞察をもってこの点をついたものであった。彼は皮肉とともにフレイベル主義の幼稚園を批判している。「顔に笑みをたたえて親切そうにすることによって子どもを愛する者となるのではないし、棒や藁を使う手先の仕事をやれば、それだけで学校が子どもの樂園となるというものでもなからう。もしも我々が教育の仕事を立派に道理に叶って行なはうとするならば、我々はヒューマニティの発達（註七）の歴史や法則のみならず、子どもの発達の歴史や法則を研究せねばならないのである」「あの睡気を催すような長たらし（註八）い、妄想にみちた手続きを書いた幼稚園の教科書〔恩物の手引書〕から我々は脱却しなければならぬ。そして科学と芸術の広い視界に立って、最も広い愛と最も深い信仰をもって我々の心を充さなければならぬ。」

ドクター・ヘイルマンはフレイベルの精神をよく理解していた。しかし多くの人のように、単にフレイベルが教えているからという理由で、教材の細かい手続きにまで固執するこ

とはしなかった。それから毎年、彼は繰返して、幼稚園が危機に立っていることを全国大会の席上で警告している。

「もしも幼稚園の教師が恩物を教育の手段としてではなく、目的のものとしてみるならば、それはフレイベルの精神を失なっているのである。……昨日誰かが、我々は子どもの所にまで下っていかなければならぬと云われた。けれども私はむしろ、子どもの所にまで上っていかなければならぬと云いたい。もしできるならば、あの無邪気な、二心のない、純粹に單純にすべてのものを樂しむ、あの子ども（註九）の水準にまで自分自身を引き上げるように努力しなさい。」「私は、高価な材料を誇り、至るところでフレイベルという名をきかされる多くの幼稚園よりも、フレイベルの名前などきいたこともない田舎の学校で、遙かに立派な幼稚園を見たように思う。」

（註八）

のみならず教育の専門外で、幼稚園運動に熱心な人々からも、幼稚園の現状に対する警告の聲がきかれ、幼稚園の根本精神に沿い、もっと單純に解釈して、できるだけ能率的に運営することの必要が説かれていた。幼稚園運動提唱者の一人であるドレーパー氏は次のように云っている。「今日の午後私は一群の幼稚園の貴婦人たちが、謎のような哲学的論議に耽っているのをきいた。それはきつと哲学者のドクター・ハリスでさえ困惑するに違いないような問題だった。」（註九）

フレーベルの教育理論に関する複雑な議論は、門外漢にさえも、幼稚園はもとの意図から外れてきていることを感じさせたのであった。

今やフレーベル主義の批判される時は、十分に熟してきた。一八九〇年、全国教育連盟大会の席上、ルイスウィルのアンナ・ブライアン女史は、幼稚園の教師たちが文字通りフレーベルの体系に追従していることを非難して、まさに爆弾的報告を行なった。それは心ある人々の注目をひくとともに多くの人々から反撃をうけたものであった。ここに保守的フレーベル主義幼稚園派の人々と、進歩主義幼稚園の派とが分れて対立するようになるのである。(つづく)

註一' perry, C.M.: The St. Louis Movement in philosophy.

Univ' Oklahoma Press. 1930

Harris, W. T.: Report of St. Louis Board of Education.

1875-6, p. 79-119

註二' Harris, W. T.: Report of st. Louis Board of Education

1873~4

註三' philips: statistics of Kindergarten in 1919-1920,

U.S. Bur. Educat. Bull. 1922, p.1-7

philips: " " in 1921-1922, " 1923, p.1-7

註四' 有院局長、フレイベルの恩物の理論とその実際、フレイベル

館 昭和三十年

註五' 莊司雅子 フレーベル教育学、柳原書店、昭和十九年

註六' 莊司雅子 幼児教育学 柳原書店 昭和三十年

Blow's: Kindergarten Education, in Monographs on

Education in the United states, Ed. N.M. Butler. J.

B. Lyon Co. Albany N.Y., 1900

註七' Fisher, L.: The Kindergarten. Unites States Bureau

of Education Bulletin of Commissioner, 1903

註八' Hallman w.N.: Opening Address. National Educati-

on Association 1885, p. 349~351

註九' Hallman w.N.: Opening Address. National Educati-

on Association 1887, p. 332~334

Draper, A.A.: The Duty of the State in Relation to

the Kindergarten. National Education Association,

1892, p. 174~186